

連載コラム



みずき野と
その周辺の
植物と昆虫



第30回

タケとササ



もとよし ふさお
本吉 總男

2017年1月

「松竹梅」という熟語があります。広辞苑には「松と竹と梅。三つとも寒に堪えるので、中国では歳寒さいかんの三友さんゆうと呼んで画の題材とされた。日本では、めでたいものとして慶事に用いる」とあります。ウメについては本コラム [第10回「ウメとサクラ」](#) で取り上げており、マツについては、別の機会に、他の針葉樹とともに述べたいと思い、今月のコラムではタケおよびササについて述べることにします。

1 タケ・ササはイネ科植物

植物学者、本田正次の著書『植物学のおもしろさ』(朝日選書 366)の中に「木でも草でもないタケとササ」という項目があります。要約すると、タケの組織は木化して堅いということは木の性質であるが、地下茎によって繁殖することや、一度開花すると枯れてしまうことが一部の草の特徴と共通する。したがって、木と草の性質を併せ持ち、どちらともいえないから、木でも草でもないと考えるのが妥当であるということです。つまり、植物の型には、木と草と竹(笹を含む)があるというわけです。

タケやササをタケ科に分類する学者もいますが、普通はイネ科の植物とされています。稈かん(イネ科植物の中空の茎を稈と呼ぶ)には節があって、節と節との間が中空になっていること、通常の木と違い、生長しても太くならないことは、イネやムギと共通の性質です。タケの花はめったに咲きませんが、咲いた花の構造は基本的に他のイネ科の植物と同様です。

2 タケとササの違いとバンブー類のこと

次に、タケとササの違いです。タケとササの区別は一般的には、丈が高くなるものをタケといい、丈が低いものをササと呼ぶと考えられているようです。しかし植物学者の間では、いわゆるタケノコを覆っている「竹の皮(幹の節から出る)」が生長したのち稈かんからはげ落ちるものをタケといい、生長後もずっと稈かんを取り巻いているものをササと呼ぶのが普通です。この考えに従えば、丈が高くなるメダケは竹の皮がいつまでも残存しているのでササ、対照的に小さなオカメザサは竹の皮がすぐ稈かんからはがれ落ちるのでタケということになります。いずれも地下茎によって広がり、竹藪(竹林)、笹藪を作ります。

タケの種類にタケ、ササの他、地下茎が非常に短く、イネやススキのようにひとつの株からたくさんの茎を出す一群のタケがあり、竹林を作りません。この仲間はバンブー類と呼ばれています。広義では、タケもササも英語でバンブーと呼ばれていますが、狭義でバンブーといえは上記のバンブー類のことです。バンブー類は熱帯性のタケで、日本でも西日本の暖地で栽培されるホウライチクはバンブー類のタケです。無論、みずき野周辺で見ることにはできません。

3 タケ・ササの開花と繁殖

タケ類の開花と繁殖については、週刊朝日百科『世界の植物』91号の中に、かなり詳しく説明されているのでその概要を紹介します。

まず開花ですが、マダケ類(マダケ、モウソウチク、ハチクなど)に例をとると、開花時期が来ると竹林に張りつめた地下茎から生えているタケは年齢に関係なく、すべて花を咲かせ、大部分は枯れ、地下茎も死んでしまいます。次に述べるように、竹林は若いタケが生えて再生しますが、次に花が咲くのは、それから120年前後と推定されています。

次に竹林の再生についてですが、地下茎がまだ生きている間に、そこから小さな若竹が生え、その根もとから新しい地下茎が出て、若竹と共に伸長し、次第に太いタケが生えるようになり、竹林は復活します。若竹は種子が発芽して生じるものもあるようですが、マダケは開花してもほとんど種子ができません。他のタケやササも開花の周期は異なるかも知れませんが、マダケ類と同じように開花や再生を行うと思われます。

4 みずき野周辺のタケとササ

日本にはタケやササの種が数多くありますが、残念ながら、みずき野周辺には栽培種、野生種を含めて数種が見られるに過ぎません。

(1) モウソウチク

モウソウチクは日本では最も大きなタケで、直径20センチ、高さ20メートルに達するものがあります。稈の節には環状の膨らみかんが1本あります。モウソウチクは食品としてのタケノコや竹材としての利用価値が高く、最も馴染み深いタケですが、実は中国

原産で、日本には江戸時代中期、琉球を経て1736年に薩摩藩に伝わったとされています(週刊朝日百科『世界の植物』91号)。

みずき野周辺には私有ですがモウソウチクの竹林がかなりあります。



モウソウチク 1月上旬 貝塚地区



モウソウチクの稈の節 環状の膨らみが1本

(2) マダケ

マダケはモウソウチクに次いで大きなタケで、直径15センチ、高さ20メートルに達するものがあります。稈の節には環状の膨らみが2本あり、膨らみが1本のモウソウチクと区別できます。マダケは古く中国から伝えられたともいわれ、また在来種ともいわれています。竹材としての用途が広く、最も多く栽培されています。尺八もマダケで作られます。みずき野周辺にもマダケの竹林がかなりあり、その多くは私有とされます。



マダケ 1月上旬 貝塚地区



マダケの稈の節 環状の膨らみが2本

マダケに似たハチクというタケがあります。稈の面は緑色ですが、蠟ろうのような物質で覆われているため白っぽく見えます。稈の節にはマダケと同様、環状の膨らみが2

本あります。マダケのタケノコの皮には斑点がありますが、ハチクでは斑点がありません。ハチクも竹材として優れているため広く栽培されているタケなので、みずき野周辺にもあるかも知れませんが、まだ見かけていません。

(3) オカメザサ

オカメザサは高さ2メートル以下と小さいのでササというイメージですが、生長すると竹の皮が^{かん}稗から離脱するので、「ササ」とつく名前とは違ってタケの仲間とされています。庭園や公園で観賞用に栽培されています。みずき野周辺にはありませんが、松前台の大山公園に植えています。

オカメザサの和名は、東京浅草の大鳥神社の酉の市でこの竹に^{おかめ}阿亀の面や紙製の小判などを吊り下げて売る習慣があったことによるのだそうです(週刊朝日百科『世界の植物』91号)。



オカメザサのタケノコ 7月上旬
松前台大山公園



オカメザサの藪 9月中旬
松前台大山公園

(4) メダケ

メダケは^{かん}稗がかなり高く、一見タケのように見えますが、生長しても竹の皮が^{かん}稗から脱落しないので、タケではなくササの仲間です。野生のものが多いと思われれますが、竹細工に利用されるので、栽培されているものもあるかもしれませ



メダケ 12月下旬 上高井地区

ん。^{かん} 稈の高さは4～5メートル、直径は2～3センチほど。次に述べるアズマネザサによく似ていますが、葉の先が少し下を向くこと、^{ようしょう} 葉鞘の先端が傾斜していることで、アズマネザサと区別できます。

通常植物の葉は基部に^{ようへい} 葉柄(葉の一部で茎・枝につながる細い軸)^{じく} が付いていて、^{ようへい} 葉柄が直接枝の節についています。しかしタケ・ササやイネ・ムギなど、イネ科植物の葉では、^{ようへい} 葉柄の下部が^{さや} 鞘状に変化しています。この^{さや} 鞘状の組織を^{ようしょう} 葉鞘と呼びます。



メダケの稈 竹の皮が稈から離れない



メダケの葉鞘 先端が傾斜している

(5) アズマネザサ

アズマネザサはみずき野周辺でもいたるところに雑草のように生えているササで、^{かん} 稈の高さは通常約2メートル程度ですが、もっと高いものもあり、メダケによく似ています。上述のように、メダケの葉は先が少し下を向きますが、アズマネザサの葉はおおむね真っ直ぐで、先端が下に向くことは少ないようです。^{ようしょう} 葉鞘の先端はメダケと異なり傾斜することは少なく、多くは水平になります。

なお、アズマネザサより葉の幅の広いネザサというササがありますが、分布は東海以西で、みずき野周辺にはありません。

アズマネザサは通常は野生種で、栽培されることはほとんどないと思われませんが、^{かん} 稈が細工物に利用されることはあるようです。



アズマネザサ 11月中旬 本町地区

アズマネザサの葉鞘
先端が傾斜しない

(6) クマザサ

クマザサは1メートル半以下の低いササで、葉は秋まで全体が緑色ですが、晩秋には周辺が黄色くなり、冬には白くなります。このように周囲が白く縁取られるので、漢字では「隅笹くまざさ」と書きます。「熊笹」ではありません。日本特有の笹で、野生のものは京都の一部の地域にしかないようです。しかし葉が美しいので、各地の庭園や公園でよく栽培されています。

クマザサと同様、冬に葉が白く縁取られるササにミヤコザサがあります。しかし、クマザサの葉の裏には毛がなく、ミヤコザサでは葉の裏に毛が密生かんしていること、稈かんの節はクマザサでは膨らんでいないが、ミヤコザサでは球状に膨らんでいる点で区別できます。



クマザサ 12月下旬 さくらの杜公園

クマザサはみずき野周辺にはほとんど見かけませんが、さくらの杜公園に小さな藪があります。ササ自体もごく貧弱なので、目につきにくいかもしれません。

● ● 余話:竹と笹と風 ● ●

風は目に見えませんが、詩歌では風を受ける植物の動きによって、または風音によって、吹く風のさまを表現することがあります。イギリスの詩人クリスティナ・ロセッティ(1830～1894)は、“Sing-Song: A Nursery Rhyme Book”と題した童謡集の中で、「風の様子」を次のように歌っています。

Who has seen the wind?
Neither I nor you:
But when the leaves hang trembling
The wind is passing thro'.

Who has seen the wind?
Neither you nor I:
But when the trees bow down their heads
The wind is passing by.

クリスティナ・ロセッティは、ラファエル前派の画家で詩人のダンテ・ガブリエル・ロセッティ(1828～1882)の妹です。童謡とはいえ、風の通りすぎるさまを木の動きによって巧みに表現しています。1番の歌詞はさほど強くない風を、2番の歌詞は吹きすさぶ風を感じます。

この童謡に西条八十^{やそ}(1982～1970)は『風』というタイトルをつけて、次のように翻訳しました。童謡「風」は草川信の作曲により歌われるようになりました。年配の方なら多分ご存じでしょう。

西条八十訳、草川信作曲の唱歌『風』(原文)

だアレ
誰が風を 見たでしょう？
僕もあなたも 見やしない、
けれど木の葉を ふる 顫わせて
風は通りぬけてゆく。

だアレ
誰が風を 見たでしょう？
あなたも僕も 見やしない、
けれど樹立が こ だち 頭 あたま をさげて
風は通りすぎてゆく。

日本人もまた、草木の動きや音によって風を表現します。花吹雪や松風、あるいは竹や笹の動きによって風の姿を見ることが多いようです。ここでは、竹や笹の動きや風音によって風を表現している詩歌をいくつか挙げてみましょう。

ささの葉は み山もさやに さやけども
われは妹 ^{いも} 思ふ 分かれ来ぬれば

柿本人麻呂 万葉集 (133)

わが屋戸の ^{やど} いささ群竹 ^{むらたけ} 吹く風の
音のかそけき この夕 ^{ゆうべ} かも

大伴家持 万葉集 (4291)

竹の葉に 風吹きよわる 夕暮れの
もののあはれは 秋としもなし

宮内卿 新古今和歌集 (1805)

窓近き ^{むらたけ} いささ群竹 風吹けば
秋におどろく 夏の夜の夢

春宮大夫公継 新古今和歌集 (257)

笹の葉は ^{みやま} 深山もさやみ うちそよぎ
こほれる霜を 吹くあらしかな

摂政太政大臣 (藤原良経) 新古今和歌集 (615)

芭蕉は激しい木枯らしを次のように詠んでいます。

^{こがらし} 木枯や たけにかくれて しづまりぬ

松尾芭蕉

芭蕉 (1644～1694) はモウソウチクが日本に入る以前の人ですから、木枯らしが吹き込んだのはマダケかハチクの竹林でしょうか。

激しい風を表現するには、やはりモウソウチクが最適と思われます。

まど ご や
円かなる 月の後夜とし なりにけり
もうそう ほ
孟宗の秀の 大揺れの風

北原白秋

ご や
後夜とは、夜の後半のことです。真夜中の満月に映し出された大揺れの孟宗、
もうそう
幻想的な光景が目に浮かびます。